

首都陥落間近 オオタナゴ拡散最前線

萩原富司、熊谷正裕、諸澤崇裕、奥井登美子（土浦の自然を守る会）

1. はじめに

外来生物の防除対策は水際の防衛が重要であり、一旦侵入してしまった際は生息域が限定されている初期コントロールが効果的である。2000年頃霞ヶ浦に侵入したオオタナゴは北浦から利根川へ、さらに水路でつながった千葉県下総水域に生息域が西進しており、このままでは中川、荒川下流部の東京都内への侵入も時間の問題となっている。水域内での拡散防止と水域外への人為的拡散防止には、特定外来生物の指定を待っている間に合わない状況である。われわれは拡散防止と侵入先の監視を目的にパンフレットを作成し日本全国の淡水魚保護活動団体と淡水魚研究者に配布している。

霞ヶ浦とそれに接続する水域におけるオオタナゴ生息調査を継続している。ここではオオタナゴ定着地点から年毎に広がる生息域の状況を報告し、水域外への人為的拡散に対する警鐘としたい。

2. オオタナゴの霞ヶ浦流域における拡散状況

初期：調査を開始した2001年には霞ヶ浦の小野川河口河口域と新利根川河口域の2ヶ所に限定されていた。この両地点では淡水真珠養殖が行われており、どちらか一方が侵入地点と考えられる。しかし両地点にまたがって漁場を使用する養殖業者がいるため、真珠貝はオオタナゴ産卵期の春にも頻りに移動されており、この中に産卵されていたオオタナゴが浮出して増えた結果と考えられる。

霞ヶ浦拡散期：霞ヶ浦の4地点におけるタナゴ類の組成変化を見ると、2003年に清明川河口、2004年に潮来と神宮橋、2005年に北浦蔵川河口でオオタナゴがはじめて認められた(図1)。2008年には4地点すべてにおいてオオタナゴがタナゴ類の7割以上を占めた。初期定着地点から4地点までの距離と初見年までの時間から霞ヶ浦での拡散速度は11.5km/年と計算された。

西進期：霞ヶ浦に接続した水路は利根川 印旛手賀沼水系 中川、荒川水系と西に広がっている。そこで2008年霞ヶ浦下流部と利根川とを水路で接続している横利根閘門、小見川閘門、萩原閘門、常陸川水門(常陸川大閘門)で生息調査を実施した。萩原閘門を除くすべての霞ヶ浦側水域でオオタナゴが確認され、横利根閘門では利根川側でもオオタナゴが確認された。これらの閘門は週末になるとバスボートが頻りに行き来するため魚の移動は容易となっている。つぎに利根川と印旛沼をつなぐ長門川と印旛沼、手賀沼で調査した結果手賀沼で現認、また聞き取りにより長門川では2006年から、印旛沼では2007年からオオタナゴが漁獲されているという(図2)。

首都侵入期?：手賀沼と利根川は江戸川 - 中川 - 荒川と運河でつながっており、今回のパンフレット配布先からすでに中川八潮水門(埼玉県)において平成19年10月30日1個体が釣獲されたとの情報を得ている。

本研究は2006年度年賀寄附金、2007-8年度動物園ゴリラ基金と2007年度のPRO NATURA FUNDの助成を受けて実施した。

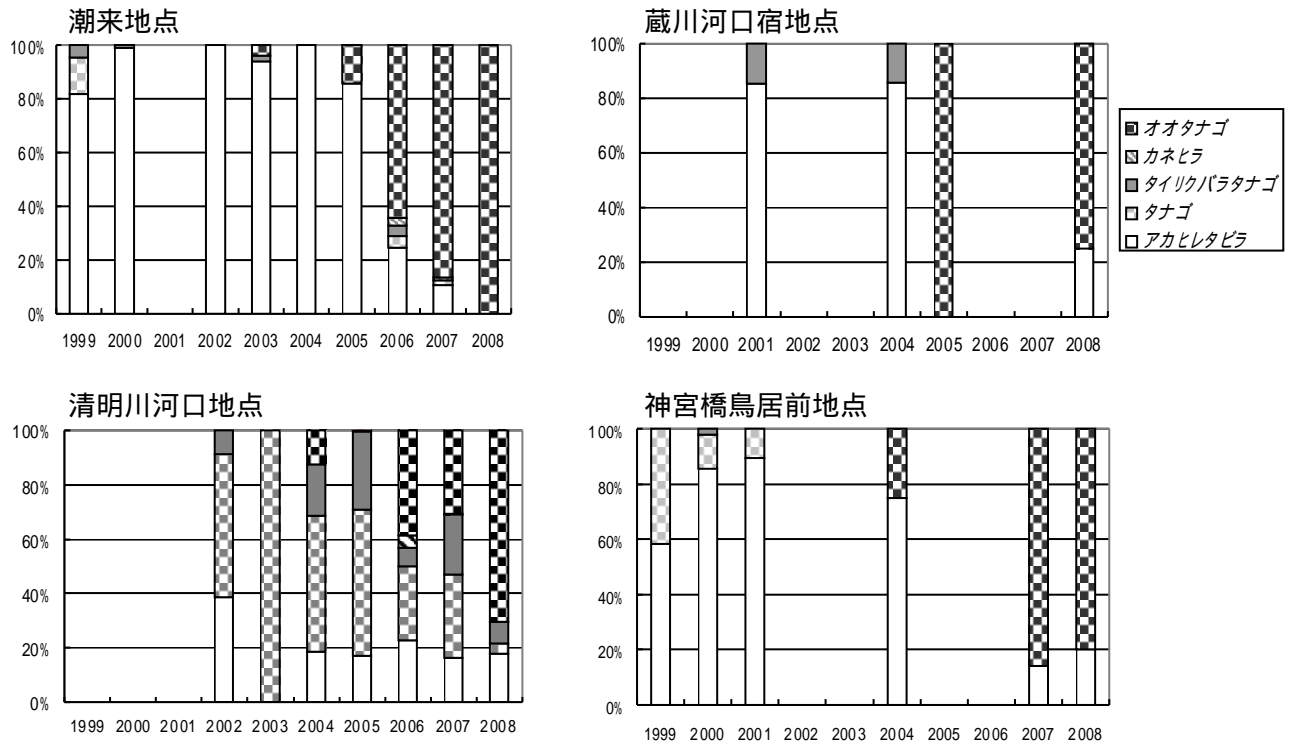


図1 タナゴ類組成の経年変化

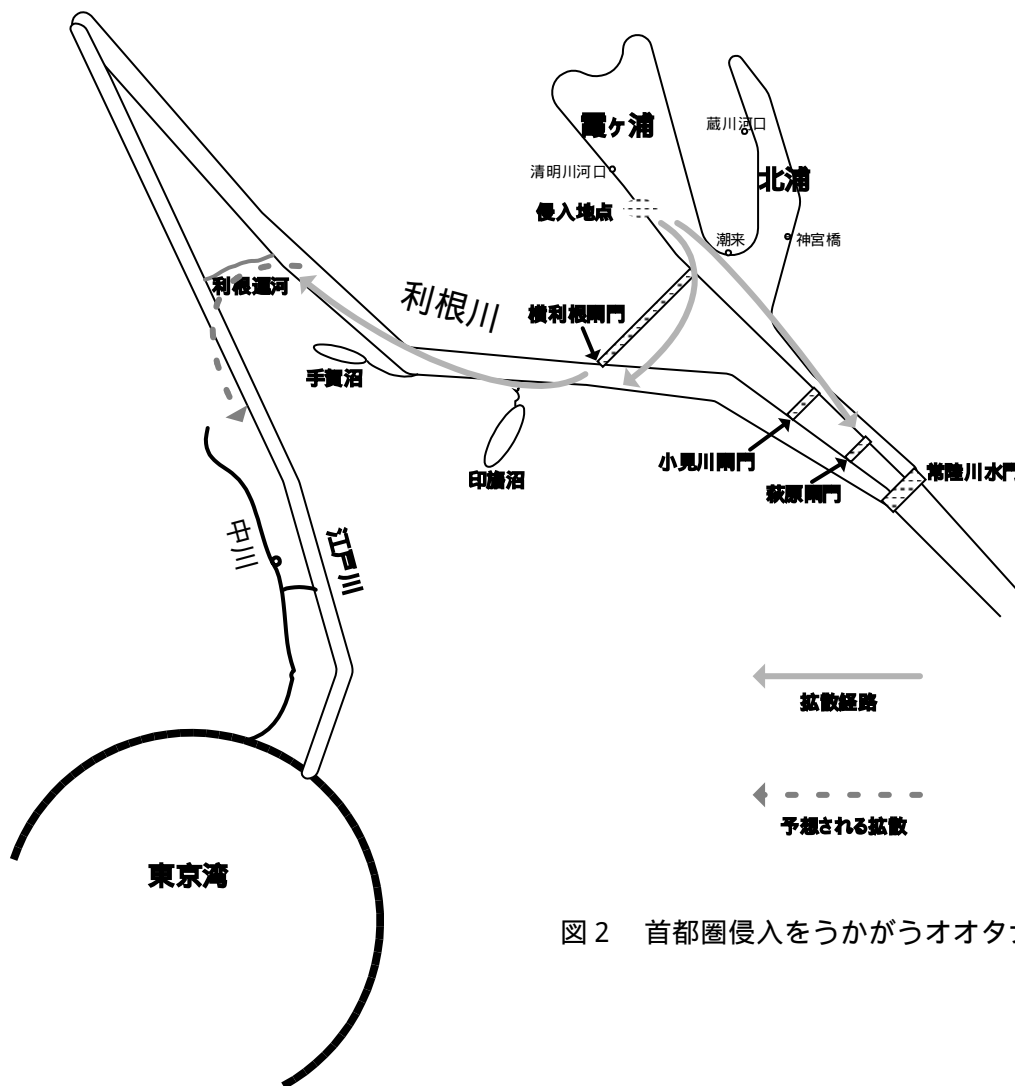


図2 首都圏侵入をうかがうオオタナゴ